

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	13-009	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Risk factors in late adolescence for young-onset dementia in men: a nationwide cohort study. 青年後期における男性若年発症性痴呆の危険因子：全国コホート研究		
<b>執筆者</b>		
Nordström P, Nordström A, Eriksson M, Wahlund LO, Gustafson Y.		
<b>掲載誌</b>		
JAMA Intern Med. 2013 Sep 23;173(17):1612-8. doi: 10.1001/jamainternmed.2013.9079.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
若年発症認知症、アルコール中毒、人口寄与危険		23939347
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 65歳以前に診断される痴呆である若年性痴呆 (Young-onset dementia, YOD) は該当家系で遺伝子突然変異との関連が指摘されている。その他の YOD 発症の危険因子を特定することは、多様な病態でおこる本症を理解する上で重要である。青年後期における、その後の YOD 発症の危険因子を評価する。</p> <p><b>方法：</b> 1969年1月1日から1979年12月31日までのスウェーデン陸軍徴兵登録制度からコホートを同定した。危険因子の候補として、認知機能・身体的特徴などを徴兵時点で評価した。両親の認知症の有無などその他の危険因子として可能性のある因子も国家登録突合制度を用いて採取した。対象は強制徴兵制に徴用されたスウェーデン男性 488,484 人 (平均年齢 18 歳)。対象者は 1950 年 1 月 1 日生まれから 1960 年 12 月生まれの者。アウトカムは全タイプの YOD。</p> <p><b>結果：</b> 平均 37 年間の追跡期間中に、487 人の男性が YOD と診断された (年齢中央値 54 歳)。Cox 回帰分析によると <math>P &lt; 0.05</math> の有意な危険因子は、急性アルコール中毒 (多変量ハザード比 4.82 [95%信頼区間, 3.83-6.05] ; 人口寄与危険 0.28、脳卒中 (2.96 [2.02-4.35]; 0.04)、抗精神病薬服用 (2.75 [2.09-3.60]; 0.12)、うつ ((1.89 [1.53-2.34]; 0.28)、父が認知症 (1.65 [1.22-2.24]; 0.04)、アルコール以外の急性薬物中毒 (1.54 [1.06-2.24]; 0.03)、徴兵時の認知機能低値 (1 標準偏差減少辺り 1.26 [1.14-1.40]; 0.29)、低身長 (1 標準偏差減少辺り 1.16 [1.04-1.29]; 0.16) および収縮期血圧高値 (1 標準偏差減少辺り 0.90 [0.82-0.99]; 0.06) であった。これら 9 つの危険因子を総合した人口寄与危険は 68% であった。少なくとも 2 つの危険因子を有し認知機能が低い方から 3 分の 1 以下の男性が追跡期間中に YOD を発症する危険性は 20 倍 (ハザード比 20.38 [13.64-30.44]) であった。</p> <p><b>結論：</b> スウェーデンの全国から抽出されたコホートにて、YOD 男性の多くを説明する 9 つの危険因子が同定された。これらの危険因子は相乗的に作用するが、修正可能なものであり青年期にその端を発する。従って早期予防の対象となる因子であるといえる。</p>		